

新刊紹介

支那佛教の研究

常盤 大 定著

本年三月『後漢より宋齊に至る譯經總錄』なる雄篇を著作された常盤博士が六月には又本書を世に出されてその超人的精進振りを發揮されてゐることは若き學徒に對する大なる刺激であり鞭撻であらねばならぬ。

本書收むるところ左の十六篇、その多くは嘗て諸學術雜誌に發表されたものであつて、新に稿を起されたものは「四十二章經につきて」と「周末隋初に於ける菩薩佛教の要求」の二篇に過ぎないが、なほ其後の研究によつて増損改換せられたもので殆んど原文のまゝのものはない。

一、支那佛教史大觀 二、漢明求法説の研究 三、四十二章經につきて 四、廬山の悲遠を中心として 五、東晉時代の道安と僧朗と羅什及び當時の佛教思想 六、隋の靈裕と三階教の七階佛名 七、天壽國について 八、周末隋初に於ける菩薩佛教の要求 九、隋の天台大師の教學及び天台山の古今 十、唐の杜順の法界觀 十一、支那華嚴宗傳統論 十二、續

一六〇

華嚴宗傳統論 十三、十住心論を中心とする華嚴宗學問題 十四、唐の善導大師に關する問題 十五、密教の發源地たる唐の青龍寺につきて 十六、支那佛教文化の種々相

右各篇に就いて詳述するを得ず、今は簡單な紹介をなすにとゞめる。一・二千年に近き支那佛教の變遷を(一)傳譯時期(前漢末・至東晉道安)、(二)研究時期(東晉羅什・至南北朝末)、(三)建設時期(隋初・至唐玄宗)、(四)實行時期(唐玄宗・至北宋末)、(五)繼紹時期(南宋・至清末)に時代區分をなし以てその概觀を述べられたものであつて、著者の支那佛教史に對する遠觀的な見解・意味づけが現はれてゐるのである。而してかゝる見解の背後には著者多年の研究が論據として含まれてゐることは云ふまでもない。二、佛教の支那傳來に關する尤も有名な説話たる漢明帝求法説を檢討されたものであつて、明帝求法説そのものの發展を考察されてゐることは注意すべきであるが、牟子の理惑論を劉宋時代の作かと思はれてゐることは學者によつて異論多きところであらう。三、支那最初の譯經として甚だ有名なる四十二章經に就いて、新出の資料によつて研究されしものである。四、五、は相應するもので六朝初期の濃潤たる支那佛教界を説かれたものである。即ち北支那長安に於ける羅什一派の學解の佛教、江南廬山に於ける悲遠を中心とする實踐佛教展開の樣相を主として明かにせられしものである。六、は三階教祖師信行的師としての靈裕に就いての研究であり、七、は天壽國が西方樂土であることを實證されたもの。八、九は密接なる關聯を有

するもので支那佛教思想に一轉回をもたらしめた天台大師の教義の出現には周末隋初の菩薩佛教の要求が故へればならぬ。換言すれば天台大師の教學は菩薩佛教の要求が必然的に生まされたものなることを主張されしものである。十、支那華嚴宗の祖と云はれる杜順の法界觀の檢討であり、十一、十二、は支那華嚴宗史とも云ふべきもので、一祖杜順・二祖智儼・三祖法藏及び華嚴に就いて主として論ぜられし百三十頁に亘る雄篇である。

十三は華嚴教學の内容に關するもの、十四は善導に就いて主として史蹟の上から究明されしもの、十五、密教の發源地たる長安の青龍寺に關する研究で我が平安佛教に關係深きは云ふまでもない。十六、石佛・石經の上から支那佛教文化の一面を考察されたものである。

各篇を通じて一貫した特徴の一つは著者が多年生命を賭して調査されし彼地現在の資料が巧みに織り込まれ且それが論據の有力なる一つとなつてゐることであらう。(菊版五二〇頁 價三、八〇(N))

皇國軍學秘傳

源家訓閱集

國體の本義を説き日本精神を闡明せられつゝある時、國史の研究にありても斯かる方向に於てなされるのも尤もである。而して之が具體的研究にあたりては、日本精神が國史の上に顯現されたる姿としては種々あり得るが、その一の對象として兵

法の研究も亦重要視されるわけである。かゝる意味に於て本文書の如きも非常に貴重なものと言はねばならぬ。

本文書は眞鍋竹次郎氏所藏にかゝる古寫本四十二卷を印行せられたものにして既にその「解題」に於て徳重淺吉教授の研究がありて明かにされてゐるが、それによると本文書は小笠原訓閣集の抄録として其の最も信ず可き形であつて室町時代中葉のものであらうと云はれる。又その傳來の經過についても恐らく信州小笠原の一族なる宮内大輔義成が長時没落後に武田氏に附屬して上野甲斐の間にある内、南藏院秀盛なる軍僧に免許せし後年眞田昌幸が秀盛と特別な關係がありて讓與されたものであらうと。要するに本文書は近世兵學の源流として貴き文獻であり、近世の如き科學的なものの發達せない中世に於ける兵法として時代的特色を示し、そこには神道・佛教・支那思想等を内容として有し、いはゆる中世に於ける兵法の性格とでも云ふべきものが明かに見られる。之によりても我が國の兵法の思想的發達も時代と密接な關係にある事が了解される。従つて本文書のもてる兵學史上に於ける價值も亦大なるものがあると考へられる。

以上紙數の都合上簡單な紹介となり本文書の價值のそこなはれんことを恐れるが、本文書は影寫本及活字本として印行せられてあり、研究者には便利である。次に内容の目次を示しておくことにする。(非賣品)

第一類日取集。第二類陳形集。第三類幕・旗集。第四類武略集。

第五類氣傳集。第六類策・團・扇集。第七類武羅・弓袋・毛沓集。第八類檢見・調伏集。第九類運勢集。第十類目錄及附載集。

——(宮田)

日本佛教史研究

藤原 猶雪著

本書は、著者が嘗つて學術雜誌に發表せられしものを、新たに一卷に集録せられたる七百十六頁の大著である。著者は夙に佛教史特に眞宗史には造詣深く、既に眞宗史に關しては若干の著書を物せられてゐる。然るに從來佛教史に關しては纏めての發表はなかつた。此度時期熟して發表せられる事となつた事は、やがて發刊せられるとある『眞宗史研究』と共に、我等の同道ないそむ後輩に益するところ大にして、著者の喜びを持つものである。

左に項目を示せば(説明の便宜上番號を附す)

- 1 佛教傳來考
- 2 崇佛可否の論議と蘇我物部兩氏の確執
- 3 初期の佛教傳數と歸化人
- 4 上宮記の成立と其逸文
- 5 上宮聖德法王帝說の研究
- 6 上宮皇太子菩薩傳に就いて
- 7 上宮皇太子傳補闕記の成立と其特異性

- 8 明一撰述聖德太子傳の逸文
 - 9 聖德太子傳曆復原の研究
 - 10 日本佛教印書史の研究序說
 - 11 善導大師本具兩疏弘傳の研究
 - 12 勅版無垢淨光經陀羅尼考
 - 13 山家における學生と堂衆との鬭爭
 - 14 平安時代における佛典の雕造摺寫
 - 15 空也上人の生涯及その亞流
 - 16 高野版造雕考
 - 17 正安版般舟三昧行道往生證印奥記を中心とする史的考察
 - 18 史料としての續選擇文義要鈔
 - 19 鎌倉時代各地における佛書開版の業績
 - 20 五山の沿革と其の摺刷事業
 - 21 千葉宣胤の開城と其の信仰
 - 22 徳川時代における法然上人漢語燈錄の改竄刊流
 - 23 澤菴宗彭の配流及謫所の生活
- 本書は、全編二十三項目に別れてゐるが、大別して三つの問題が取扱はれてゐると言つてよく、(1)(2)(3)は佛教傳來とそれに伴ふ事件、(13)(15)(21)(23)は個人及びその他の問題、他の十六項は佛教書史に關するものである事が知られる。而して全體を通じて、常に用意周到な準備と史料の嚴密な吟味によつて結論を出して居られるものの如く、初頭に掲げる『佛教傳來考』を一讀しても、その一端が窺はれる。特に聖德太子に關

する諸傳に就いては、相當紙數を盡されてゐるが、近時聖德太子の生活並に思想が注目せられる時、太子に關する諸傳の書史學的研究が收録せられてある事は、その基礎的工作をなすものとして、吾人の等しく注意すべきところである。佛教書史に關しては、『日本佛教印書史の研究序説の緒論に、「從來、佛教研究と云へば、まづ東洋人の特權とせられてゐた。今や我等は却つて泰西諸家によりて啓發さるること、愈々多からむとして來た。然れども吾人は尙彼我にありて閑却されつつある問題、太だ趣からざるを嘆ぜざるを得ない一人である。例へば佛教地理及び佛書傳播史などの組織的研究の如きは、夙に佛教の特殊研究として必ず成さるべき研究事項にあらざりしか。特に時代信仰史觀を云爲するものにして、之等の研究を忘れて果して能く何ものの權證を建て得るであらうか。吾人が茲に題して日本佛教印書史の研究と云ふは、之に日本寫經史と日本佛教著述史とを併せて完成さるべき日本佛教書史の一部の使命として、吾人は一日も早く其の出土せむことの、切なる希求的意思を表白せる文字にして、敢て拙稿に鬼面を冠するものでないのである。たゞ吾人は書史學の一部なる印書史について多少の趣味を有し、題跋を蒐集し來りしを以て」とその研究方針を述べ、豫定編目として、第一部奥記（印書並に墨書）を中心とする研究に、奈良・平安・鎌倉・南北朝・室町の時代を含め、第二部書實を中心とする研究に、安土・桃山・江戸の時代を含めて居られるが、是によつて見ると、永年之等の研究に力を注がれしものの如く、

本書の内容も大半それ等の成果によつて占められてゐる。斯かる研究は、本來の性質上努力の入る割合に地味なもので、近來等閑にされ勝ちに感ずる時、著者の不斷の精進によつて本書が物せられし事は、斯界の爲に慶賀すべき事である。されば日本佛教史特に佛教書史の研究に進まんとするものの良き指針として、是非一讀すべき著書である。（發行、東京・大東出版社、昭和十三年七月刊、定價五圓五拾錢）（奥村記）

續眞宗大系教行信證金剛錄

開華院法住述

續眞宗大系第七卷には教行二卷の講錄が收められ、第八卷には信卷以下化身土までの錄が載せられてゐる。金剛錄は開華院法住師三十七歳の時天保十三年に、越後國頸城郡能宿の廣榮寺に於て開筵された時の筆錄で、全卷を百二十三會に亘つて講述して居られる。

師、諱は法住、東水・開華院と號し、文化三年佐渡國北方の蓮正寺に生れた。文政六年十八歳にして越後に赴き長生院の門に入り、翌八年三河に至り妙音院了祥に就くこと十一年の長きに及んだ。更に天保六年三十一歳にして高倉學寮に入り開悟院靈旺の社中となつた。開悟院は圓乘院宣明の門人であるから、住田智見師の「大谷派先輩學系略」には師を以て宣明系の學者に配してゐられる。

然し乍ら、一方妙音院了祥に師事すること十有一年であつたから、師の學風は妙音院のそれを承けて居り、周到なる考證と明徹なる論旨は本書の全卷に認められるところである。

續眞宗大系第五第六兩卷には圓乘院講師の廣文類聞誌が編入され在來の刊本に於ける誤字誤植等を一掃し嚴正なる校正を経て世に出た事は宗學研鑽の士を裨益する處大であつたが今更にその名著たるを謳はれて未だ梓に上る機會の無かつた金剛錄が座右に備へられ得ることは續眞宗大系刊行による賜である。

内容に就ての批評は今こゝでは述べる暇はないが、金剛錄の著者が圓乘院の學系を繼承しつゝ、然も香月院師會下の逸資妙音院の學風を傳へて居ることから見れば、本書には自らそこに香月院圓乘院兩師の學風が綜合止揚せられ、豊富な内容と共に嚴正適確な決擇に自然と首肯せしめられる點が多いことであらう。從來本書が識者の認めるところであつた理由もこゝにあらうと思ふ。次に本書の特色とも見られる事は、單に字偈の訓詁解釋に止まらず常に西山鎮西等の異流の教義を提示することによつて眞宗教義がいかに元祖の教旨を正しく繼承して居るかを明瞭にすることに力められてゐる。この方法こそは正しく了祥師の夙に得意とする處であつたのである。

兎に角本書は教行信證の講録中異彩ある名著と言はるべきもので好學者に御奨めする。(G, K記)

一遍上人の研究

京都時宗青年同盟編

一六四

本書は我が國淨土教分派の最後を莊つた捨聖一遍上人の六百年大遠忌記念事業の一つとして編輯出版せられたものである。夫々の専門學者の研究が一括上梓せられてゐる。編者の言を借りていふと、本書出版の主目的は「上人の徳を讃仰し、教義を研討し、自己の反省を深く掘り下げて、以て青年學徒の酬恩を果さうとする」にあるものの如く、随つてその内容も、この目標に外れないもののみが編み込まれてなり、かうした記念讃仰の出版には平凡な手法ではあるが、まことに適はしい出版であるといふべきであらう。目次を掲げてその内容の一般を紹介すると次の如くである。

第一部

- 一遍上人 神勸念佛と六十萬人頌義……………吉川賢善
 - 一遍教學の中心問題に就て……………下村稟然
 - 一遍上人念佛往生論……………織田正雄
 - 消息法語に表はれた宗祖の思想に就て……………福島邦祥
 - 宗祖の京洛化益について……………橘 俊道
 - 『一遍上人語錄』の研究……………平田諦善
- 第二部
- 一遍上人繪傳について……………望月信成
 - 一遍上人の文藝……………多屋頼俊

新編 觀經四帖疏

石橋 誠道編

拾聖一遍上人を憶ふ……………高千穂徹乘
一遍上人の教義とその相承の一端について……山口光圓
右の内、第一部はこの派々内の學者のみの發表を輯めたものらしく、主として一遍教義の根本的な諸問題を取扱つてなり、第二部は何れも派外専門家の手になつたもので、多く一遍上人の側面的背後的な研究が收められてゐる。第一部第二部ともに夫々の専門家の研究であるだけに、相當深く突つ込んだ問題が提出せられてなり、又一應夫々解決せられてゐることは嬉しい限りであるが、各執筆者の論文間に重複した論說の多いことが目に着くし、又、齒の浮くやうな詠嘆的な讃辭が往々見られることも(特に第一部に於いて)、虚心な讀者にとつては甚だ好ましからざることであるが、これも此の種の記念出版としては無理からぬことかも知れない。
兎に角本書は從來餘りにも淋しかつた一遍教義研究書の爲に萬丈の氣焔をはくものであり、この方面の研究者の好個の手引となるものである。

因に本書には以上の外更に、「一遍上人略年表」「一遍上人繪巻展覽會出陳目錄」を附載してゐる。(昭和十三年十月發行・本文二三七頁・京都丁字屋書店・定價壹圓五拾錢)(藤)

これは京都佛教専門學校が學習用教本として善導の『四帖疏』(義山本)を和譯出版したものである。編者が自らいふてゐるやうに、「初學者の者を資益する爲に」編纂されたものであるから、何處から何處までも初學者の利便第一を目標としてなり、全卷に切なる婆心の溢れた書物である。その一例を挙げると、

(一) 全卷便利な國語に翻譯せられ、章段分科を詳記してゐること

(二) 文前に簡潔な解説を載せてゐること

(三) 本文の冠註に文疏所釋の經文を掲げて、經文と疏文との關係連絡を明示してゐること

(四) 更に脚註を設けて、字句用語の簡單な解説を附してゐること

右の内、(一)(二)及び(四)は例の國譯一切經にも先例のあることであるが、(三)のみは本書の最初の試みとして特筆さるべく、これらの諸點に於いて、本書が特に新編と題せられ、更に初學者の啓蒙的な學習用教本と銘打たれた所以が存するのであらう。

尚ほ文前の「觀無量壽經四帖疏解説」も、簡にして要を得たものである。内容左の如し。

- | | |
|--------------|------------|
| 一、善導大師以前の淨土教 | 二、善導大師の宗教 |
| 三、善導大師の四帖疏 | 四、宗祖大師と四帖疏 |
| 五、五部九卷の概要 | 六、五部九卷の前後 |
| 七、四帖疏の本邦傳通 | 八、四帖疏の末註 |

印刷極めて鮮麗。(昭和十三年九月發行・菊判二五五頁・定價二、五〇・京都佛教專門學校出版部發行) (藤)

印度佛教史概説

龍山 章 眞著

最近一般に歴史が新しい方法論の下に自覺せられて來てゐると共に佛教史の研究にありても梵藏の提供する資料に依り新しき方法論の下に目覺しき發展を爲してゐる。

即ち教理史・思想史・教團史・佛教藝術史・典籍史等の諸立場よりして印度佛教の通史を叙述せんと方向を意圖してゐるものではあるが、かゝる立場よりする作品は従つて専門的用語の極めて煩雜な純専門的作品となるは止むを得ないとは云へ初步的入門書たるには尙難いのである。他方又初步的入門書は概して種々なる教學の羅列に終り佛教精神の發現體としての當否を見極め得ない作品たるに止まり易いのである。

故に是等兩者の弊を避け乍ら然も専門學校程度の教材の爲に成るべく理解し易く又最近の研究成果を紹介しつつ印度佛教史の全貌を簡潔に記述しようとして著はされたのが此の印度佛教史概説である。

著者は先づ佛教史學一般を「佛教精神が種々なる文化現象として現はれた跡を研究し記述する科學である」と定義し従つて其の爲には個々の事象の明確な把握と佛教全體との關連が考察

されねばならないと爲し印度佛教史の區分を三方法即ち一、地方的區分法 二、時代的區分法 三、系統的區分法に一應分け今は第二、時代的區分法に従つて(一)原始佛教時代(二)部派佛教時代(三)大乘佛教時代(四)密教時代の四時代に分つて叙述してゐられる。然し大乘佛教時代にも小乘佛教は存し又密教時代には大小二乘共に殘存してゐたのであるから各時代の名稱は其の時代の主流を爲した教學から名づけたものであることは無論のことである。著者は更に此の第二の時代的區分法による思想史に加ふるに第三の系統的區分法を以てし常にそれに留意しつつ單なる思想史或は教理史に墮することなきやう努力してゐられる。

今、目次を擧げて内容の一般を窺へば次の如し。

緒言

序説

第一篇 原始佛教時代

第一章 佛陀時代

第二章 釋尊傳

第三章 教團とその變遷

第四章 經律二藏の起源

第五章 原始佛教の教理

第二篇 部派佛教時代

第一章 教團の分裂

第二章 佛教王阿育

第三章 三藏の成立

第四篇 部派の教學

第五章 小乘佛教の成立と變遷

第三篇 大乘佛教時代

第一章 大乘佛教の興起

第二章 大乘初期の經典

第三章 龍樹とその後繼者

第四章 大乘中期の經典

第五章 無着及び世親

第六章 佛教藝術の發達

第七章 大乘後期の諸論師

第四篇 密教時代

印度佛教史に多くのデッドロックのあるは衆知の如くであるが、かかる場合は問題を提出してその意義を述べるに留め斷案の無闇を避けてゐるが全般にわたつては概説書として稀に見る精密な牽強なき引證をなして内容を確實ならしめてゐる。

殊に原始佛教・部派佛教に於ける夾雜した諸思想にも拘はらず夫等を内容的に緊密に相關せしめてゐる點に特色の一を見るであらう。

更に章末に擧げられたる内外の參考書、典據の見出し、内容の見出し及び寫眞數葉の挿入は初學者にとつて便宜である。

とまれ茫漠として廣汎なる印度佛教全體を思想的に深く掘り下げ乍ら要領よく僅か一八〇頁の袖珍の書となし、而も専門學校程度の教科用として著はれた點に本書の意義を認めなければならぬ。(法藏館發行、菊版一八〇頁、定價壹圓)(佐々木)

研究室彙報

眞宗學研究室

△眞宗學會

○六月二十四日午後三時より當研究室にて安井主任以下の出席を請ひ本學會々則の一部變更を決議、事項左の如し。

一、雜誌『眞宗論攻』を『會報』に改め、學生本位の機關誌とする件

一、研究發表の外に隨時信仰座談會を開催する件

一、毎年一回見學旅行をなす件

○九月二十八日午後三時より加藤教授を中心として第一回信仰座談會開催、會場第十一教室、參會二十名。

○十月二十二日懸案の見學旅行を決定、紀要左の如し。

見學目的地 福井方面

指導 可西教授・岸助手

參加者 久保田・藤原副手以下學生十二名

會費 六圓

二十二日 午前〇時一分京都發北陸線武生へ、毫攝寺・